

## 巻頭言

アビ・モーショウィッツは1976年に「意思の克服：人間の諸事を扱う情報処理」を刊行し、コンピュータの未来社会への影響を予知したのであるが、この書は当時のコンピュータ産業や技術出版業界を取り持つような通俗的な予測の域を超えた先見性に満ちており、今日「意志の克服」は1976年以來の二十年の歴史として読むことができる。

モーショウィッツ博士の洞察は技術、歴史的意図、ならびに現社会を形成する社会・経済の関係と力、などの理解から構成されており、それらを驚くほど巧みに統合するのを常とする。「意思の克服」では、益々巨大で強力な中央集中型コンピュータパワーという当時主流となった技術動向を考察し、個人、組織、価値、ならびに社会に起こりそうな衝撃に関する一貫した展望を書いた。

モーショウィッツ博士は、予測家には「未踏」といわれる五年から十五年という期間で現れる技術進歩の結末への理解を社会と歴史の両要因から生み出すという、うらやましくなるようなこつをわきまえている。このような予測においては現在の動向をもとにした正確な外挿補間などはできない。というのも微妙で検知できないような構造変化が社会を特徴付ける社会、経済、価値のシステムに常時起きているからであって、このような期間の将来を取り扱うには、社会構造の形成に作用する長期にわたる圧力と勢力の規範的な観点をもって坂戻るように分析せねばならない。

この十年、未来へと影響を与えてきた主な技術動向はコンピュータと通信の力の融合であって、かつその産物として、形や大きさにとらわれずにわれわれが望む仕立てで社会に分配できる新しい形の「エネルギー」であることがはっきりした。このような技術的な好機がモーショウィッツ博士の新書を駆り立て、彼の我々に説く洞察を収めることになった。

この仮想組織についての新書を少し読み進めれば、現在広く知れ渡った電子コマースやその結果変化した商や組織の特性などの事柄をはるかに超えた内容を我々に伝達しようとしていることがわかる。結果として、彼の幾つかの予測は必ずしも情報技術ベンダーや人気のある出版物、数多くの小売雑誌、多くの専門書などの描くばら色の将来に近いものではない。我々はコンピュータと通信の普及への道を歩んだのであるが、これは今日の電気のユビキティ（偏在）とうまく比較できよう。そして、この普及こそが企業システムの基礎を形作る手段を増殖させ今日の我々の商と社会の基礎を支援していると本書は指摘する。

モーショウィッツ博士は、仮想組織とはどのようなものかという正確な定義からはじめており、実際の組織で起こりつつある数多くの変化をうまく説明するという点で実に柔軟な定義である。今日、自ら仮想化していることを理解しなかったり、ビジネスをする上で仮想化するとはどういうことか理解しない多くの企業が存在することから、彼は取引商品、商業、金、その他人間システムの産物の性質についていかに新しい技術がこれらの生態に変化を与え影響をおよぼしているかについての手がかりを再考察している。そしてこれら別々の問題を総合し、我々自身の社会と世界の経済・社会および政治構造の包括的な展望を生み出すのである。彼は最終的にこれらの要因を統合し将来の骨格を与えるのであるが、その理論が過去に根付き分析が過去に他場所で起こったことに基づくことで展開されるため我々がまったく新しい観点として見なければならず、幾つかの起こりうる結果についての展望は驚きと不穏に満ちているが、これらを見捨てることはできない。「過激な批評」は技術を理解し社会を導くために必要な将来展望である、と他書で指摘しているが、本書はまさにこの意思を貫いたものである。結果として大変に斬新で刺激的な将来展望ならびに我々の直面すべき問題を取めることになった。

本書は予測の専門家や先見者に追加されるべき役割に関しても基本的な責務を果たしており、非体制的な将来に立ち向かい将来欲する現実のために個人や社会としてある程度影響をもつべきであることを読者に十分に理解させる。今日我々は自由な企業システムに順応できるが、これは商と機会について一層の社会的平等を推進するためなのか、あるいは新しい様式の経済と社会の封建制という不穏な流れに進むためなのか、といういずれかの歴史的時点に到達したように思われる。選択は我々の自由であるが、どの方向に進むのか、どのように到達できるのか、そしてなぜその道筋を真っ先に取るのかを理解することなしにはできない。モーショウィッツ博士の業績は我々が手を染めるべきこの探求に貴重な助けとなる。

